

田原本町埋蔵文化財  
調査年報  
1994・1995年度

5

1996

田原本町教育委員会

# 目 次

I. はじめに .....	1
II. 調査した遺跡の概要	
1. 1994年度（平成6年度）	
(1) 唐古・鍵遺跡第56次調査 .....	4
(2) 唐古・鍵遺跡第57次調査 .....	5
(3) 羽子田遺跡第6次調査 .....	6
(4) 八田遺跡第1次調査 .....	9
(5) 保津・宮古遺跡第12次調査 .....	10
(6) 保津・宮古遺跡第13次調査 .....	11
(7) 十六面・薬王寺遺跡第11次調査 .....	12
2. 1995年度（平成7年度）	
(8) 唐古・鍵遺跡第58次調査 .....	15
(9) 唐古・鍵遺跡第59次調査 .....	18
(10) 平野氏陣屋跡第6次調査 .....	21
(11) 平野氏陣屋跡第7次調査 .....	23
(12) 平野氏陣屋跡第8次調査 .....	24
(13) 保津・宮古遺跡第14次調査 .....	25
(14) 保津・宮古遺跡第15次調査 .....	28
(15) 十六面・薬王寺遺跡第12次調査 .....	30
III. 試掘調査・立会調査の概要 .....	31

## 例 言

1. 本年報は、田原本町教育委員会が1994年度（平成6年度）・1995年度（平成7年度）に実施した発掘調査及び試掘調査・立会調査の概要である。発掘調査については、重要な成果が得られたものについて別途、その概要を作成中である。
2. 発掘調査は、本文第2表にまとめたように受託事業については原団者に、国庫補助事業については土地所有者に多大な理解と協力を賜った。
3. 本文に記載された遺構の記号については、SDが溝を、SKが土坑を、SRが流路を表す。
4. 本文で表記された弥生土器の時期は、藤田三郎・松本洋明1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編I』（木耳社）による。
5. 本文の執筆は各調査担当者があたり、編集は藤田三郎・清水琢哉が行った。

## I. はじめに

田原本町における発掘届・通知は1994年度が19件、1995年度が29件である。両年度とも長引く経済の低迷を反映してか、依然として小規模な開発が中心となっている。ただし、94年度を底辺として、95年度からは若干開発行為も増加傾向に移行しつつある。

1994年度に発掘調査を実施した件数は7件であるが、いずれも小規模な開発に伴うもので、7件の遺物量をあわせても遺物箱120箱程度である。一方、平成7年度に発掘調査を実施した件数は8件で、件数的には前年度と大差ないようにみえるが、唐古・鍵遺跡の重要地区の調査が含まれており、出土遺物の総量は遺物箱約950箱にも及ぶ。

これら2年度にわたる発掘調査では、各時代ごとにそれぞれ新知見がみられたので簡単にまとめてみよう。

保津・宮古遺跡第14次調査では、本町において初めて縄文時代後期の遺構が確認された。このことから、調査地周辺に縄文時代後期の集落が存在したことはほぼ確実となった。

弥生時代の調査は、唐古・鍵遺跡で弥生時代全般にわたる成果が得られた。第56次・第57次調査では、遺跡辺縁部で河跡・流路を検出している。集落に近接して小河川等が数条存在することが把握できたことは、遺跡の立地・環境を考える上で大きな成果となった。第58次調査では遺跡の西部で前期～中期の居住区を区画する溝が検出され、全体が居住区であることが確認された。第59次調査は遺跡東部にあたる。調査では大環濠が検出され、その南側で、中期以降の濃密な居住遺構が確認された。第58次・第59次調査ともに極めて多くの遺物が出土し、いずれも重要な地区であることが判明した。

唐古・鍵遺跡以外でも、保津・宮古遺跡や十六面・薬王寺遺跡で弥生時代の遺構を検出している。保津・宮古遺跡は、近年の調査で集落の範囲・性格等を考えるための材料が増加してきたが、まだ資料不足であることは否定できない。今回紹介する第13～15次調査でも弥生時代の遺構を検出しているが、それぞれ検出した遺構の時期が異なっており、総体としては大規模な集落範囲に思えるが、時期的な分布をみれば小規模な集落の可能性も指摘できる。

十六面・薬王寺遺跡第11次調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構が検出された。特に、古墳時代初頭の弧状に巡る溝は円形周溝墓の可能性があり、注目される。これまで本町で検出されている弥生時代末～古墳時代前期の墓の大半が方形周溝墓の形をとっており、それらの墓制と性格や系譜に違いがあるのかどうかを含めて、遺跡の中での位置づけが必要となろう。

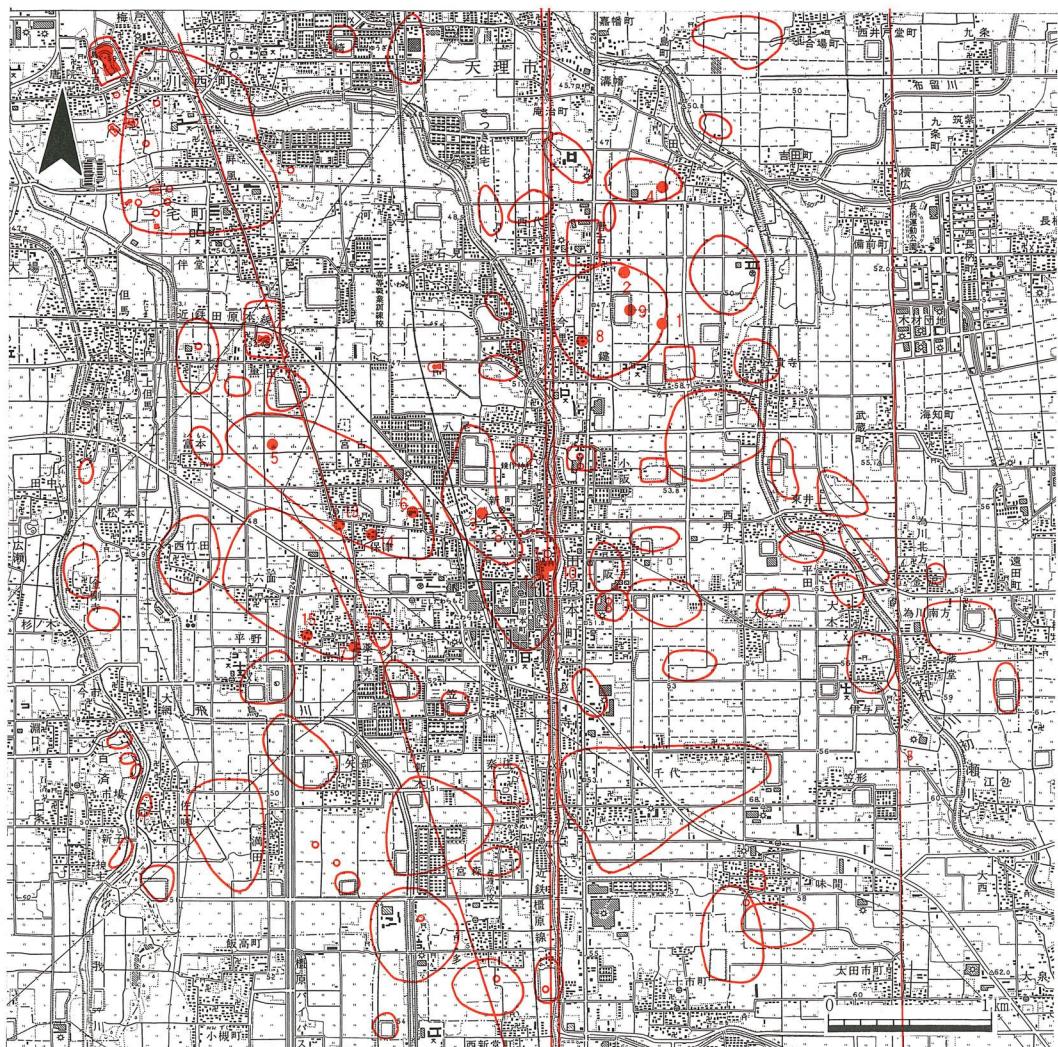
古墳時代の成果としては、羽子田遺跡第6次調査で方墳群を検出したことが挙げられる。その結果、この古墳群が方墳と前方後円墳とで構成されることが判明してきた。また、盆地中央部が古墳分布の空白地であるとする従来の考え方を見直す必要が強まったといえよう。

唐古・鍵遺跡第59次調査では、古墳時代中期の大形井戸等を検出している。古墳時代にな

ってからの唐古・鍵ムラについては未解明の点が多くあり、今回の成果は古墳時代中期にも生活遺構が存在したという点で重要といえる。

古代の調査としては、保津・宮古遺跡第14次調査で筋違道の西側側溝とみられる溝が検出されている。筋違道の遺構が明瞭に検出されたのは今回が初めてである。また、出土遺物から道の整備された時期が6世紀後半～7世紀初頭と推定されたことからも、古代の道を考える上で大きな意義がある。

中世の調査としては、唐古・鍵遺跡第58・59次調査で唐古氏の居館に関連する区画溝等の遺構が検出された。特に59次調査の第1トレンチでは土壙墓が検出されており、屋敷地の一角で埋葬が行われていたことが判明した。また、保津・宮古遺跡第15次調査では、保津環濠集落の内部で初めて調査を行うことができた。本集落の成立が12世紀までさかのぼる可能性が高くなつた。



第1図 田原本町の遺跡と発掘調査地点

第1表 田原本町における埋蔵文化財発掘届・通知一覧表

	発掘届 (57条の2)	発掘通知 (57条の3)		発掘 (県実施分)	試掘	立会 (県実施分)	計
1994年度 (平成6年度)	13	6	通知文 実施分	7 6 (1)	0	12 5	19
1995年度 (平成7年度)	18	11	通知文 実施分	16 8 (1)	2	13 5 (2)	29

第2表 1994・1995年度発掘調査一覧表

1994年度(平成6年度)										
	遺跡名	調査次数	調査地	原因者	原因	調査期間	調査面積	時期	調査担当	備考
1	唐古・鍵	第56次	田原本町法貴寺 1085-2他	田原本町	通学路整備	1994. 11. 17 ~95. 1. 25	330m <sup>2</sup>	弥生	清水琢哉	建設課
2	唐古・鍵	第57次	田原本町唐古 209他	田原本町	土地改良事業	1995. 3. 7 ~3. 13	550m <sup>2</sup>	弥生	藤田三郎	経済課
3	羽子田	第6次	田原本町新町 64-1他	かとう不動 産株式会社	分譲住宅 建築	1994. 4. 4 ~5. 8	915m <sup>2</sup>	古墳	藤田 清水	受託事業
4	八田	第1次	田原本町八田 191-2他	田原本町	通学路整備	1994. 7. 20 ~8. 2	400m <sup>2</sup>	古墳・中世	清水	建設課
5	保津・宮古	第12次	田原本町宮古 404-6他	ならコープ	倉庫兼事務 所建設	1994. 10. 13 ~11. 2	240m <sup>2</sup>	古墳・中世	藤田 清水	受託事業
6	保津・宮古	第13次	田原本町新町 190-2他	宮崎貴始	個人用住宅 建築	1995. 2. 20 ~3. 15	190m <sup>2</sup>	弥生・古墳	藤田 清水	国庫補助
7	十六面・薬王 寺	第11次	田原本町薬王寺 348-1他	松田精介 外5名	自家用倉庫 青空駐車場	1994. 12. 10 ~12. 27	285m <sup>2</sup>	弥生・中世	藤田 清水	
1995年度(平成7年度)										
8	唐古・鍵	第58次	田原本町鍵 281-1	島岡政美	店舗・賃貸 住宅建築	1995. 8. 17 ~9. 28	138m <sup>2</sup>	弥生・中世	藤田	受託事業
9	唐古・鍵	第59次	田原本町唐古 127西隣水路他	田原本町	用排水路整 備	1995. 11. 7 ~96. 3. 15	850m <sup>2</sup> (弥生は 380m <sup>2</sup> )	弥生・古墳 中世	藤田 清水	経済課
10	平野氏陣屋跡	第6次	田原本町 816-1	山辺広域 行政組合	防火水槽設 置	1995. 6. 20 ~6. 30	56m <sup>2</sup>	弥生・中世 ・近世	清水	受託事業
11	平野氏陣屋跡	第7次	田原本町 789-1	三和印刷工 業株式会社	共同住宅建 築	1995. 7. 12 ~7. 24	18m <sup>2</sup>	近世	清水	受託事業
12	平野氏陣屋跡	第8次	田原本町 788-8	前砂政直	個人住宅の 新築	1995. 7. 17 ~7. 21	11m <sup>2</sup>	中世・近世	清水	
13	保津・宮古	第14次	田原本町保津 166-4他	吉井弘美	個人住宅の 新築	1995. 10. 17 ~11. 21	423m <sup>2</sup>	繩文・弥生 古墳・古代	藤田 清水	国庫補助
14	保津・宮古	第15次	田原本町保津 124他	岩田昭男	個人住宅の 新築	1996. 2. 8 ~2. 28	124m <sup>2</sup>	弥生・中世 ・近世	清水	国庫補助
15	十六面・薬王 寺	第12次	田原本町薬王寺 399-4他	田原本町	道路の拡幅 工事	1996. 1. 9 ~1. 20	95m <sup>2</sup>	弥生・中世	清水	建設課

## II. 調査した遺跡の概要

### 1. 1994年度（平成6年度）の調査

#### （1）唐古・鍵遺跡第56次調査

**位置と環境** 唐古・鍵遺跡は標高47～49mの沖積地に立地する。調査地は遺跡の東端にあたり、平成5年度に行われた第54次調査の南側隣接地に相当する。また、調査地西側では第27次調査が行われている。これらの調査により、調査地周辺に自然流路が存在することが判明している。

**遺構・遺物の概要** 調査地は全体が自然河道による堆積であり、その中に数条深く切れ込む所がある。弥生中期の流路SR-102Aは東西方向の流路で、流木等が出土した。後期初頭の流路SR-103は、3カ所で深い切れ込み部を検出しているが、いずれも一連の堆積とみられる。この分流とみられるSR-103Eでは、埋没がある程度進んだ段階で完形土器群が投棄されていた。土器は小形品が中心で、半完形品を含めると21点となる。また、分流の1つとみられるSR-103Dからは手づくね土器1点が出土している。

調査地北側で検出された古墳時代後期の流路SR-101は、方向と位置から、27次調査の古墳時代流路と一連のものとみられる。

**まとめ** 河道内における小規模なトレンチ調査だったため、各流路の方向や平面的なつながりについては不明な点が残った。ただし、環濠帯の外側の自然環境を復元する上で大きな成果となった。また、弥生時代後期初頭ごろの流路内で検出された完形土器群は、集落東端の川辺で祭祀的な行為が執り行われていたことを思わせる。



▲ SR-103E 遺物出土状況（東より）

◀ 調査地全景（南より）

## (2) 唐古・鍵遺跡第57次調査

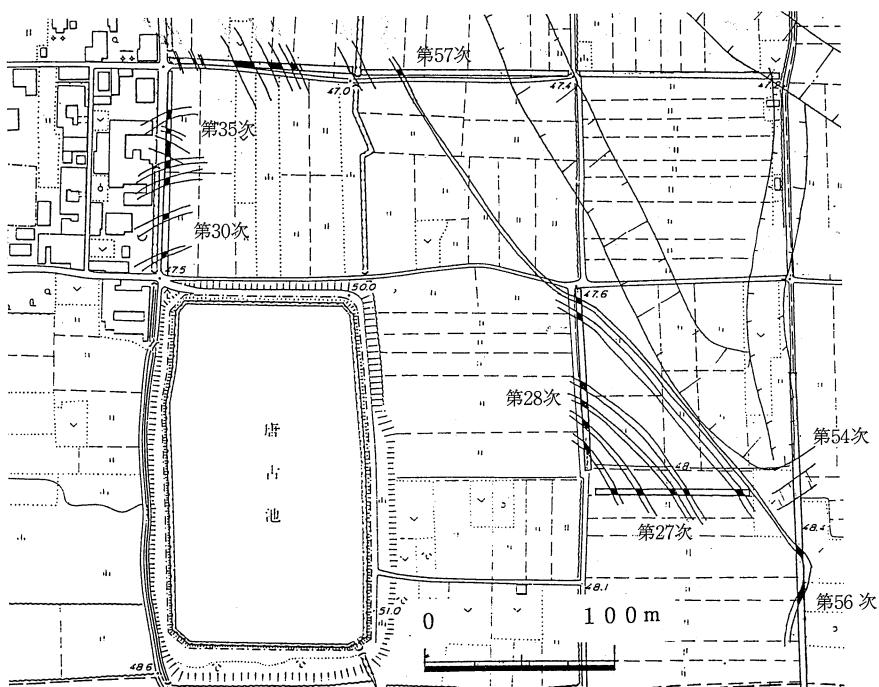
**位置と環境** 今回の調査地は遺跡の最北東端の箇所である。調査地の西南部分を第30・35次調査として行っている。この調査では集落を囲む環濠と考えられる遺構を検出している。今回の調査地は、それらの遺構が検出されるか、あるいは遺跡の範囲外になるかという地点である。全体は工事中の立会調査とし、一部遺構の検出される部分において調査を実施した。

**遺構・遺物の概要** 調査区の西端で弥生時代の3条の小溝を検出した。SD-201は幅1.2m、深さ0.6mを測る。東南-北西方向に走向する。時期は前期末あるいは中期初頭と考えられる。SD-202は幅1.5m、深さ0.6mを測る。東南-北西方向に走行する。遺物は若干の土器片と流紋岩の剥片が出土している。時期は前期末あるいは中期初頭と考えられる。この溝は一回り小さい溝に再掘削されている。弥生時代中期であろうか。SD-203はSD-202の東1mで検出した浅い小溝である。溝の幅0.8m、深さ0.2mを測る。川跡・流路は第1トレンチの中央から第3トレンチにかけて8条の川跡あるいは流路を確認した。

第3表 第57次調査検出河跡一覧表

遺構名	幅(推定)	走行方向	時期	最終堆積	備考
SR-101流路	4m以上	南-北	奈良-平安	茶灰色砂質土	54次の河道
SR-102流路	9m	南南東-北北西	弥生中期後半	灰色細砂	
SR-103流路	5m	〃	〃	淡灰色細砂	
SR-104流路	5m	〃	〃	灰白色細砂	
SR-105流路	6m	〃	〃	灰色粘砂	
SR-106流路	1.5m	〃	〃	灰白色細砂	
SR-107河跡	30m	〃		灰色粘土	54次の河道
SR-108河跡	8m以上	東南東-西北西		灰色粘土	

**まとめ** 今回の調査の結果、集落北東端の様相、すなわち、調査地が環濠帯からその外部であることが判明した。東西330mにおよぶ土層確認で、調査地が比較的安定した土地であつて、そこに2条の河と数条の流路（砂で埋没した溝の可能性もある）が流れるという状況であった。水田等はないようと思われる。また、最も土地が安定している調査地西端では弥生時代前期の小溝を3条検出し、ムラの最北端として認識することができた。



第2図 第57次調査及び周辺遺構関連図 (S=1/4000)

### (3) 羽子田遺跡第6次調査

**位置と環境** 羽子田遺跡は、田原本町小室集落から大字新町・八尾にかけてひろがる弥生時代から奈良時代にかけての複合遺跡である。特にその中心となる時代は古墳時代前期から後期であり、周辺の小字名「三ツ山」からも多数の古墳が群在していたことが推測できる。また、古墳群が形成される以前には弥生時代中期・後期～古墳時代前期の集落も営まれていた。本遺跡の西側には弥生時代から古墳時代にかけての集落である保津・宮古遺跡、北西には斜めに走行する筋違道と島の山古墳・黒田大塚古墳を盟主とする三宅古墳群、南側には平野氏陣屋跡などの遺跡群に囲まれている。

**遺構と遺物の概要** 検出された遺構としては、古墳時代と中・近世～現代の各時代のものがある。特に、古墳時代の遺構は多く、大きく前期の集落関係、中期・後期の古墳（羽子田5～8号墳）の二つに分かれる。

**古墳時代前期** 井戸101は調査区の南東部で検出した $1.8 \times 1.5m$ 、深さ0.85mの井戸である。断面形態は壁の崩壊により袋状を呈している。遺物は無遺物層の中層をはさんで最上層と最下層から出土した。布留型甕等や桃の種子が出土している。井戸102は調査区の中央東端で検出した直径2.1m前後の井戸である。東側半分は現代粘土採掘坑により破壊され、南端も柱穴に切られている。深さは1.5mを測り、断面形態は摺鉢状を呈する。遺物は各層から出土しているが、特に上層からはかなりまとまった量の遺物が出土している。また、下層からは完形の吉備地方の甕1点などが出でた。井戸103は調査区の中央西で検出した直径1m、



調査地全景（北より）

深さ1.1mの井戸である。断面形態は摺鉢状を呈する。遺物は井戸の上層から甕、大形壺、高坏等が破片となって出土している。また、下層からは完形のミニチュア鉢、小型丸底壺、布留型甕がそれぞれ1点ずつ出土している。落ち込みは調査区南西端の西侧拡張部分で検出された。深さ1m、幅14m以上で、幅1mのトレンチによる確認のみであったが、西肩は確認できなかった。北西方向に走る自然流路の可能性がある。遺物は少なかったが、布留式の古相（古墳時代前期初頭）と見られる壺、甕、小型器台、山陰地方の甕、駿河地方の壺の破片が出土した。

古墳時代中・後期 5号墳は調査区南端中央部で検出された東西13mの方墳である。周濠の幅は北溝で最大2.5m、深さ0.15mある。東溝の半分と南溝は調査区外であり、南北の規模は不明である。主軸はやや西に振っている。東溝からは5世紀の須恵器がまとめて出土した。円筒埴輪、朝顔形埴輪が北溝から多く出土している。6号墳は調査区北端中央部で検出した墳丘規模12mの方墳である。周濠の幅は南溝で最大4mである。周濠の深さは0.35m前後である。主軸は7号墳とほぼ一致する。西溝の大半は8号墳によって切られているほか、現代粘土採掘坑による破壊をうけていた。墳丘の北東部分も調査範囲外である。また、東溝は極めて浅いが、北半には古墳時代中期の須恵器、埴輪の集中する部分がある。7号墳は調査区南東端で検出された南北10m、東西12mの方墳である。溝の幅は北溝で2.5m、西溝で3m前後あり、深さは0.6~0.8mである。主軸は大きく西に振っている。南溝西端から西溝南端にかけて家形埴輪が散乱していた。そのほか、円筒埴輪や6世紀の須恵器も出土してい



井戸102 遺物出土状況（西より）

る。8号墳は前方後円墳と推定され、調査区北半西端で検出された南北方向の溝と、調査区西側拡張部で検出された南西方向の溝が前方部の周濠となる。しかし、墳丘部北東隅と同南東隅はいずれも現代粘土採掘坑により大きく破壊されており、確実な墳丘形態・墳丘規模を押さえることは極めて困難である。前方部前面の幅は22~23mとなることが推定される。遺物は、木製品（建築部材）と埴輪、須恵器が見られる。埴輪は人物（巫女）の破片が東周濠北半で確認されている。須恵器は、東周濠南端付近から6世紀の短頸壺が完形で出土した。また、古墳時代の東西溝が調査区中央部で検出された。周囲の遺構から古墳の一部となる可能性もあるが、この溝に対応する区画が見られないことから、墓域の区画など古墳以外の用途を考慮すべきかもしれない。埴輪、須恵器が出土した。

まとめ 検出された古墳時代前期の井戸3基は、調査区が古墳時代前期前半の居住域であることを示しており、また、西側にある大きな落ち込みの存在から、この地が当期集落の西端であることがわかる。出土遺物においては、3次調査で検出された前期古墳の埴輪が含まれるが、墳丘自体については検出することができなかった。これらの埴輪の出土遺構が古墳時代中期の方墳であることから、前期古墳は築造後極めて短期間で削平を受け始めたとみることができる。古墳時代中・後期では、方墳3基、前方後円墳と考えられる周濠が検出された。いずれもすでに削平されており墳丘および主体部については何ら明らかにすることができなかった。円筒埴輪の中に淡輪技法を有するものがあり、奈良県で初めての出土となる。このように、この地域が中・後期古墳の濃密な分布地域であることが明らかになった。



5号墳周濠（西より）

#### (4) 八田遺跡第1次調査

**位置と環境** 遺跡は標高45m前後の沖積地に所在する。調査地の北東300mには初瀬川が北西方向に流れる。これまで調査は行われていないが、古墳時代等の遺物の散布が知られている。遺跡の北東に接して現在の八田集落があるが、中世の豪族八田氏との関連が考えられることから、中世にさかのほる集落の可能性がある。

**遺構と遺物** 調査は長さ100m、幅4mの南北に長いトレンチで行った。調査地全体が沼地状の堆積であり、低湿地として理解できる。上層からは鎌倉時代の瓦器椀等が、下層からは平安時代ごろの土師皿や5~6世紀ごろの須恵器が出土している。また、草食動物（馬？）の下顎骨が1点出土している。

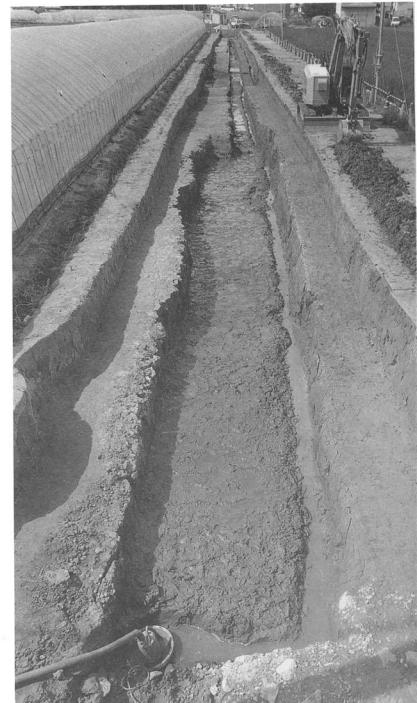
調査地の北側ではこの低湿地形成以前の自然流路が2条検出されているが、遺物は古式土師器の細片等が少量出土したのみであり、明確な時期をおさえるには至らなかった。なお、この2条の自然流路は一つの蛇行する流路である可能性が高い。

**まとめ** 今回の調査の結果、この地域が中世以前は川や沼地であったことが判明した。そのためか、中世素掘小溝もほとんどみられなかった。ただし、中世の遺物が調査地北端付近で比較的多く出土していることから、中世の生活域が調査地北側に広がっていることが予想される。また、調査地南半を中心に古墳時代後期の遺物が散布していた。これらの遺物は、付近に当該時期の遺構が存在することを示すと考えられる。

なお、西側150mに位置する花きセンターの開発工事の際に砂層の広がりが確認されており、今回検出された河道や沼地を形成した河の本流が本地の南西に存在した可能性がある。



第3図 調査地の位置



調査地全景（南より）

## (5) 保津・宮古遺跡第12次調査

**位置と環境** 遺跡は標高45~48mに立地する。調査地は遺跡の西北部に位置し、西側隣接地では第3次調査が、東側では第4次調査が行われている。第3次調査では弥生時代の河道と古墳時代前期の集落が、第4次調査では飛鳥時代の倉庫群が検出されている。

**遺構・遺物の概要** 調査地全面で南北方向の中世素掘小溝が検出された。重複が激しく、この遺構により古墳時代～古代の遺構が大きく削平されている。溝中から出土した遺物には、6世紀頃の須恵器が大量に含まれる。

また、古代の小溝が調査地東半で検出されている。SD-101~103は3m間隔に平行して掘削されており、ほぼ東西方向だが若干西南西側に傾く。SD-104は筋違道の方向とほぼ一致する北北西方向の小溝で、時期は先述の3条の溝に先行する。これらの溝の時期は古代にさかのぼる可能性がある。また、ピット群も調査地東半で検出されているが、その大半が古代の遺構とみられる。

古墳時代後期の土坑SK-102は北西方向に長軸をもつ長方形の土坑であるが、調査区外にも広がるため、溝の可能性もある。遺物は土師器甕、須恵器蓋坏等が出土している。

**まとめ** 今回の調査地は第3・4次調査の中間に位置することから、古墳時代前期と飛鳥時代の遺構の広がりが問題となった。今回の調査の結果、古墳時代前期の集落は、本調査地まで拡がらないことが確認できた。また、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構が調査地東半で検出されたことから、古代の集落の範囲は本調査地がほぼ西端となると考えられる。なお、中世の耕作による削平が激しいため、柱穴の位置関係を明らかにすることはできなかった。



調査地全景（東より）

## (6) 保津・宮古遺跡第13次調査

**位置と環境** 遺跡は標高45~48mの沖積地に位置する。調査地は遺跡の東端にあたり、東側には羽子田遺跡（古墳群）が拡がる。保津・宮古遺跡の東半は調査事例が少なく、内容は不明であったが、東側250mで行われた羽子田遺跡第7次調査では古墳時代後期の方墳が検出されている。

**遺構・遺物の概要** 弥生後期末～庄内期の溝が4条検出された。幅は2~3m、深さ0.3m前後である。このうちの3条（SD-103、105、106）は、1つの方形周溝墓を形成している可能性がある。その場合、墳丘の一辺は約11mとなる。

古墳時代の遺構としては、中期の溝SD-101が東南隅で検出された。主軸は北東～南西で、幅約2m。小形壺が一点出土した。また、後期の方墳が一基検出された。周濠幅1.5m、深さ0.3m。調査区の外にひろがるため、全体の規模は不明である。朝顔形埴輪が出土した。

中世の遺構には、溝・土坑・素掘小溝等がある。SD-81は調査区南西部で検出された幅1mの溝で、トレンチ西端南側から南端中央へと弧状にめぐる。鎌倉時代の瓦器塊が完形で出土している。また、素掘小溝が多く検出されたが、多くの溝が東南東～西北西方向であり、調査地南側の現道路の方向と一致する。

**まとめ** 今回の調査では弥生時代末～中世の遺構を検出した。弥生時代後期末の溝が方形周溝墓であるなら、これが保津・宮古遺跡の墓域となる可能性も出てくる。また、古墳時代の方墳が検出されたことから、羽子田古墳群の西側への拡がりを見直す必要がでてきた。



調査地全景（西より）

## (7) 十六面・薬王寺遺跡第11次調査

**位置と環境** 十六面・薬王寺遺跡は、田原本町大字十六面および薬王寺に所在する遺跡である。国道24号線バイパス工事に伴って行われた第1次調査以来10次にわたる調査が行われてきた。その成果は主に中世居館（1次、10次など）や耕作関係（1次、7次、8次など）の遺構が中心であったが、遺跡の南部の第6次調査では、古墳時代前期の方形周溝墓が検出されており、古墳時代の墓地が遺跡南部に存在することが明らかになっている。今回行われた第11次調査は、第6次調査の行われた地点から東に約200mの地点である。

**遺構の概要** 調査地全体が河道 S R -102のため幅等は不明である。西端の深掘り部分では1.5m以上を測る。河道内部には深く切れ込む所が數カ所あるようである。調査地西端の上層で完形土器を含む土器群と銅鏡が出土した。上層は弥生時代後期後半と考えられる。S R -102埋没後に形成されたS R -101は古墳時代中期頃の河道である。東岸のみ確認したが、南東-西北方向に走行する。幅は西岸が調査範囲外のため不明だが、39.5m以上ある。深さは0.5mで、幅の割合に対して浅い。中層の砂層堆積の西端から完形の土師器大形甕が1点出土している。S D -101は調査地東半で検出した円形にめぐる溝で、円形周溝墓の可能性がある。下層より完形土器を含む大量の古墳時代初頭の遺物が出土しており、生駒西麓産の手焙形土器、弧帶文で飾られた壺などが出土した。墳丘推定径は18.4m、溝の幅は推定3.6m、深さ0.6mを測る。墳丘は完全に削平されている。上層からは古墳時代前期の丸底壺がほぼ完形で出土している。S K -101はS D -101に囲まれた内側部分（墳丘部）で検出された土坑である。半完形の甕と、人頭大の石が埋められた状態で出土した。何らかの埋納遺構である可能性がある。古墳時代後期と考えられる。



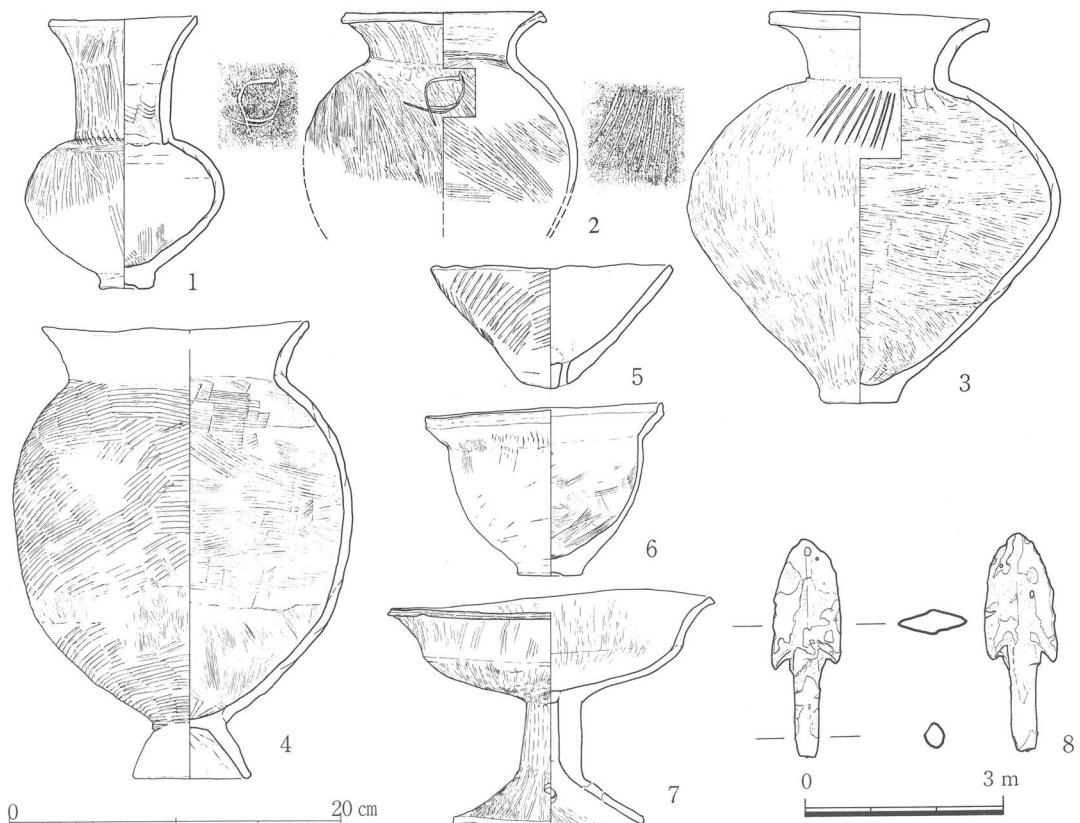
S D -101 (東より)

**遺物の概要** 今回の調査では、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺物が多く出土した。その大半は S R -102 と S D -101 の遺物である。

S R -102 からは弥生時代後期後半の土器群が検出されている（第4図）。完形品も多く含まれ、一括して投棄された可能性がある。2・3は記号文が施された広口壺である。なお、3は生駒西麓産である。8は銅鏃で、長さ3.3 cm、重さ3.34 gを計る。

S D -101では、古墳時代初頭の遺物がまとまって出土している（第5図）。4は上層出土の甕である。底部にもタタキが入っており、庄内式併行であろう。4の他は下層出土土器である。3は弧帶文風の装飾が施された壺である。器形から搬入土器と考えられるが、産地は不明である。5・6は甕である。5は底部の小型化が進んでいる。7の高坏は、浅い椀形の坏部をもち、脚柱部から裾部への屈曲が明瞭である。なお、この高坏は脚部内面に布圧痕がみられる。8の手焙形土器は覆部に綾杉文を施し、鉢部外面に連弧文を施している。覆部は受口状口縁の口唇部上端から直接立ち上がっている。底部は極めて小さい。生駒西麓産である。

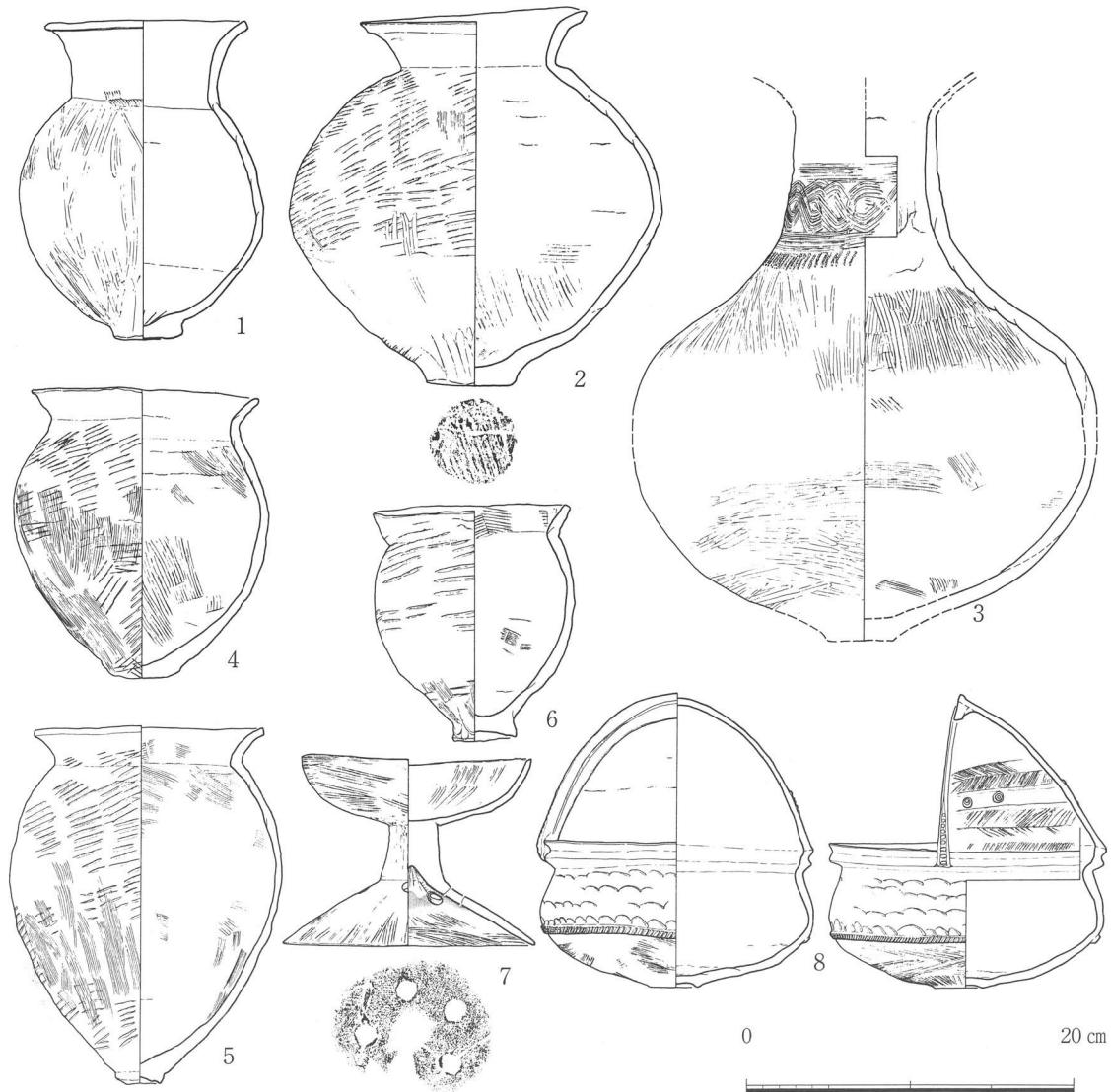
S D -101出土土器が周溝墓への供献品であるかどうかは断定できないが、弥生時代から古墳時代へと移行しつつあった時期の一括資料としては良好なものであろう。



第4図 S R -102出土遺物

まとめ 今回は中世遺構についてはほとんど触れることができなかつたが、調査地西側で鎌倉時代の溝・井戸などが検出されたほか、奈良末～平安時代ごろの遺構も検出された。中世集落の中心は調査地の北西側となることが考えられ、中世集落の広がりを知ることができた。

また、今回の調査で検出された弧状に巡る溝は、古墳時代初頭の円形周溝墓の可能性がある。本調査の西側150mの地点で行われた第6次調査では布留期の方形周溝墓が検出されており、河道S R-102を挟んで両岸に時期の異なる墓域が営まれたことになる。今後、2つの墓域の関連やそれを営んだ集団を明らかにしていくことが必要となろう。特に、弥生・古墳集落としての十六面・薬王寺遺跡の中心部は未だに明確に把握されていないことから、墓と集落の総合的把握が求められる。



第5図 SD-101 出土遺物

## 2. 1995年度（平成7年度）の調査

### （8）唐古・鍵遺跡第58次調査

**位置と環境** 今回の調査地は遺跡の西部に当たり、北側を第14・46次調査、東側を第16次調査、東南側を第44次調査としておこなっている。いずれも弥生時代のムラ内部の様相を呈する土坑や溝などが検出されている。また、周辺の調査では唐古氏の中世居館跡の諸遺構を検出しておらず、本地も居館内部であることが想定できる。

**遺構と遺物の概要** 検出された主要な遺構と遺物は、大きく弥生時代と中世のものがある。前者は弥生時代の集落に伴うもの、後者は唐古氏の居館跡に伴うものである。

弥生時代前期の大溝 S D-201は調査区の西南隅で検出した。東南東-西北西方向に走行する。推定溝幅2.5m、深さ1mを測る。遺物は下層から木製容器3点・手斧柄などが出土しているが、全体に遺物は少ない。時期は大和第I-2様式である。この大溝はその位置関係から第16次調査のS D-104の可能性がある。木器貯蔵穴SK-201は調査区の西北で検出した橢円形を呈する大形の土坑である。主軸は東南東-西北西方向にある。推定規模は長軸3.3m、短軸2.4m、深さ1.1mを測る。遺物は上層と下層の間で広鉗の未成品が1点、上層からはややまとまって土器が出土している。時期は前期の前半（大和第I-1様式）で最も古い。

第4表 第58次調査検出主要遺構遺物一覧表

時代	時期	遺構	遺物
弥生時代前期	大和第I様式	大溝1条・木器貯蔵穴1基・小土坑・柱穴	木製容器3・手斧柄・広鉗未成品
弥生時代中期初葉	大和第II様式	大溝1条・落ち込み1条	
弥生時代中期中葉	大和第III様式	大溝1条・木器貯蔵穴1基・小溝	木製容器・カゴ・骨針・獸骨
弥生時代中期後葉	大和第IV様式	井戸2基・土坑	
弥生時代後期初葉	大和第V様式	井戸2基	完形土器
鎌倉～室町時代		土坑4基・大溝1条	完形瓦器碗・横櫛・銭貨



調査地全景（西より）

弥生時代中期の大溝 S D-106は調査区を横断するように延長15mにわたって検出した。本調査の最大の遺構である。前述大溝 S D-201の北側にはほぼ平行するように、すなわち、前期の大溝の北側の肩を一部壊しながら掘削している。また、逆にこの大溝の大半は後述する中世大溝 S D-51が重複しており、上層はかなり残存状況が悪い。溝の堆積状況から再掘削されていることが判断され、最初の掘削は弥生時代前期末（大和第II-1・2様式）、再掘削は中期初葉（大和第II-3様式）である。規模は当初の溝が幅約4m、深さ1.3m、再掘削は推定幅3m、深さ0.9mを測る。再掘削の土層からは大量の土器のほか、容器片、鉢片、笊、板材、骨針・獸骨（イノシシ・イヌ・ノウサギ・タヌキ・カモ・キジ・ニホンザル）が出土している。この大溝はその位置関係から第16次調査の S D-102と考えられる。落ち込み（S X-101）は調査区の東北隅で検出した。北側は調査区外にひろがっているため、全容は不明であるが、東南東から西北西方向に走行するものである。幅3m以上、深さ1.1mを測る。堆積は灰白色細砂や灰黒色粘質土、粘砂、暗灰黄色砂質土等の互層で構成されている。最上層は中期中葉（大和第III-1様式）であるが、全体は前期末から中葉初葉（大和第II-1～3様式）である。遺物は土器が多く、その他の遺物は少ない。本遺構は第16次調査の S D-103に接続すると考えられる。

弥生時代後期の井戸 S K-110は調査区の南端中央で検出した。この井戸は、弥生中期の大溝 S D-106の南肩の一部を壊して掘削されている。平面形態は楕円形を呈すが、本来は円形で北西側に楕円形の立ち上がり部がついたものと考えられる。長軸の現長1.4m、短軸復元推定0.7m、深さ1mを測る。埋土は基本的に黒色粘土の水平堆積で、最下層から完形の短頸壺が出土した。時期は後期初頭（大和第V-1様式）である。

鎌倉～室町時代では、土坑 S K-51を調査区の中央やや西で検出した。方形を呈する大形



弥生中～後期の柱穴群（北より）

の穴で、長軸2.6m、短軸2.1m、深さ0.6mを測る。堆積は厚さ10~20cmの砂質土・粗砂・細砂・粘土の互層堆積を示し、周辺からの流れ込みと滯水によって形成されたと考えられる。遺物は少なく、土坑の性格は不明である。時期は15~16世紀であろう。土坑SK-52は調査区の北東で検出した方形を呈する小形の穴である。規模は長軸0.85m、短軸0.7m、深さ0.3mを測る。遺物は土坑の底面に据え置くように瓦器碗が完形で1点出土した。土坑の性格は不明である。時期は12世紀後半である。中世大溝SD-51は調査区の南端で延長15mにわたって検出した大溝である。前述のSD-106とほぼ重複し平行するように掘削している。再掘削後は調査区の中央から東に向かって東西方向に掘削されている。最初の掘削は14世紀、再掘削は15世紀である。規模は当初の溝が幅約3.6m、深さ0.9m、再掘削は推定幅2.2~2.6m、深さ0.6~0.8mを測る。再掘削の土層からは大量の土器片のほか、銭貨、櫛片が出土している。

まとめ 今回の調査においては、現八阪神社付近を中心とした区域に前~中期のひとつの居住区を推定できるようになった。すなわち、弥生時代前~中期の大溝SD-106が居住区を区画すると考えられるからである。また、井戸や土坑、柱穴などの生活遺構が濃密な分布を示し、食物残滓などの遺物も多く、西南側に拡がっていることが予想されるのである。弥生時代後期初頭の井戸が2基検出された。この時期のものは第44次調査でも検出しており、このあたりが居住区であることを示しているが、後期中~後葉の遺構はこの付近では検出されておらず、空白地区となる。今後、この地区の後期後半の遺構分布についても検討する必要がある。中世は大溝と土坑を検出したことにより、居館内部であることは確実となった。大溝は外濠の規模より小さく、2時期にわたっており、居館内部の区画の変遷と考えておきたい。溝は、現在の水路と重複するところがあり、地割りがほぼ生きていることが判明した。



SK-110 最下層遺物出土状況（北より）

## (8) 唐古・鍵遺跡第59次発掘調査

**位置と環境** 今回の調査地は遺跡の東部に当たり、周辺においては第5・23・24・26・48次調査としておこなっている。いずれもムラ内部の様相を呈する土坑や溝などが検出している。また、唐古東氏の中世居館跡の諸遺構も検出しており、本地が弥生時代と古墳時代、中世の重複地であることが判明している。調査対象は延長400mである。近世素掘溝は全面において調査したが、弥生時代から中世の遺構に関しては遺物包含層が厚いため、部分的な調査とした。弥生から古墳時代の調査面積は約380m<sup>2</sup>、中世の調査面積は約850m<sup>2</sup>である。

**遺構と遺物の概要** 検出された主要な遺構と遺物は、大きく弥生～古墳時代と中世のものがある。前者は弥生から古墳時代の集落に伴うもの、後者は唐古氏の居館跡に伴うものである。

弥生時代前期に関しては、最終遺構面まで達していないため、明確な遺構を検出していない。ただし、第3トレンチでは大溝らしきもの（SD-3201）がある。前期の密度はそれほど

第5表 第59次調査検出主要遺構・遺物一覧

時代	時期	第1トレンチ	第2トレンチ	第3トレンチ	第4トレンチ	遺物
弥生時代前期	大和第I様式	—	—	大溝	—	木製高杯・猪下顎骨穿孔
弥生時代中期初葉	大和第II様式	—	—	甕井戸鉢・大溝	—	
弥生時代中期中葉	大和第III様式	大溝1・井戸1	—	井戸・土坑	大溝	卜骨・磨製石剣・ガラス玉・石包丁6
弥生時代中葉後葉	大和第IV様式	土坑	—	土器棺3	大溝	
弥生時代後期	大和第V・VI様式	大溝1	—	溝	井戸1・溝・流路	完形土器
古墳時代前期	大和庄内・布留式	溝1・井戸1	—	井戸2	井戸3	完形甕
古墳時代中期		—	—	井戸1・溝1	—	子持勾玉・田下駄・椅子・手網・馬骨
古墳時代後期		—	—	—	土坑1	土器・ガラス玉
鎌倉～室町時代		土壙墓2・区画溝	井戸・区画溝	井戸3・溝	—	銅鈴・白磁



第3トレンチ全景（北より）

ど高くないと思われる。

弥生時代中期の遺構は、第1トレンチAで直径3.3mの大形井戸（SK-1101）とサヌカイトの剥片が詰まった直径0.45mの小土坑（SK-1113）を検出した。SK-1101では骨針などが出土している。また、第1トレンチBでは東北東—西南西方向に走行する大溝（SD-1102）を延長10mにわたって検出した。この大溝の上層では大量の土器が廃棄されていた。下層では磨製石剣、ト骨やイヌ頭骨、木製針なども出土している。第3トレンチでは、北端で大形井戸（SK-3135）を検出した。直径5.4m、深さ1.4mを測る。中層ではト骨・鹿角・鉤状木製品、ウニの殻、アカニシ等が出土した。また、サヌカイト小剥片がおよそ $0.4 \times 1.2$ mの範囲に廃棄された状態で出土している。南端では、底部を打ち欠いた大和形甕を2段に重ねた井戸枠（SX-3103）を検出したが、上段の甕は削平を受け下胴部のみであった。この周辺で土器棺を3基検出したが、完存するのは1基（SX-3101）のみである。これは大和第Ⅲ様式の大溝（SD-3104）の埋土上につくられ、本体の甕はほぼ直立した状態であった。また、調査区のほぼ中央では石包丁の完形品6点が直径0.5mの小土坑（SK-3130）に埋納されていた。第4トレンチでは、大環濠のSD-4101を断面で確認するとどまつた。

弥生時代後期の遺構・遺物は、調査地全体に分布している。大形の遺構としては、第1トレンチBで幅3.2m、深さ0.8mの大溝（SD-1101）を検出している。この溝は庄内期まで再掘削されながら存続する。また、第4トレンチでは直径約1.5mの井戸（SK-4103）を検出し、完形・半完形土器約40点が出土した。



第1トレンチB SD-1102 (南西より)

古墳時代前期の遺構は、主に布留式の時期で第3・4トレンチで井戸5基、中期の遺構は第3トレンチで井戸1基と溝1条を検出した。特に中期の井戸（SK-3101）は、上面方形プランの一辺3.4m、深さ1.8mの大形井戸である。下層・中層は須恵器を含まないが、上層では含むことから時期的変遷を考える上で重要な遺構になる。中層からは大型の椅子、田下駄、手網、ツチノコ10点、完形甕など、上層からは須恵器や土師器、ミニチュアの完形土器、馬の頭骨等、滑石製勾玉が出土している。この井戸の南7mでほぼ東西方向の幅3.7mの溝（SD-3101）を確認した。この溝の周辺からは、完形の須恵器や土師器、子持勾玉等が出土している。

中世の遺構としては、第1トレンチで長軸1.2mと1.6mの土壙墓2基を検出したが、区画溝や墓標的なものは検出していない。また、第2トレンチで井戸1基を確認し、銅鈴1点の出土をみた。

まとめ 今回の調査地は北地区の居住地区であったが、調査が部分的かつ遺物包含層が厚く堆積していたため、下層まで至らず全容を明らかにすることはできなかった。しかし、弥生時代中期以降は非常に遺構密度の高い地区であることは間違いない、特に第1トレンチ西半、2・3トレンチ全域、第4トレンチ南半は古墳時代前中期と中世の遺構が重複する非常に重要なところであることが判明した。弥生時代中期では、石包丁の埋納土坑やサヌカイト剥片の一括廃棄など石器製作等にかかわるような遺構があったことは注目される。また、古墳時代中期の大形井戸からは馬の頭骨、溝からは子持勾玉が出土しており、祭祀行為があったことをうかがわせる。中世では、今回初めて屋敷地内の墓地が判明したわけで、今後全体的な屋敷地の構成を把握していく必要があるだろう。



第3トレンチ SK-3101 遺物出土状況

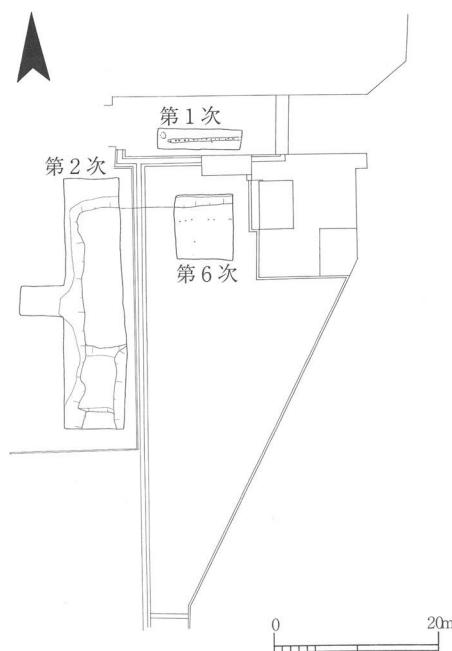
#### (10) 平野氏陣屋跡第6次調査

**位置と環境** 遺跡は標高約49mの沖積地に立地する。調査地は寺川の西側に隣接し、陣屋東端に相当するほか、下ッ道推定地にも該当する。周辺では西に隣接して第2次調査が行われており、江戸時代の南北方向大溝と船着き場が検出されている。また、北に隣接する第1次調査では、柵列を持つ東西方向の近世小溝、南北方向の中世小溝が検出されている。

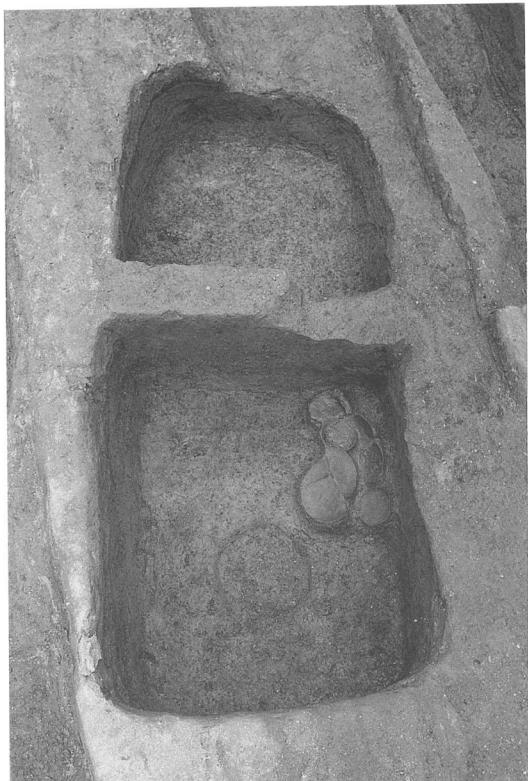
**遺構・遺物の概要** 昭和50年に取り壊された母子寮のため、調査区の南東部分や調査区中央北端が攪乱を受け、遺構が一部破壊されていた。

検出された遺構としては、弥生時代の流路、古代・中世の溝、江戸時代の溝、柵列等がある。弥生時代の自然流路 S R -101は、調査区南端よりさらに南に拡がるため幅等は不明であるが、最深部での深さは0.6m前後となる。最下層から弥生時代後期末の甕が出土している。古代の溝 S D -02は調査地中央東寄りで検出された、南北方向の浅い溝である。溝底からは9世紀前半の須恵器（長頸壺）が出土しているが、全体に遺物は少ない。

中世の遺構としては木棺墓と溝がある。木棺墓は全長1.6m、幅0.65mの規模を有し、北北東を主軸とする。北半西肩付近で鎌倉時代の土師皿5点、植物質の容器1点が出土している。骨はほぼ完全に腐朽していたが、北半中央床面付近で歯が出土している。木棺の痕跡は残っていなかったが、堆積状況から考えると木棺墓であった可能性は高い。



第6図 遺構平面図（近世）



土壙墓（北より）

近世の遺構としては東西方向の溝 S D -03がある。調査地北端で南肩のみが検出された。深さ1.2mを測る。西半のみが再掘削されているが、再掘削部分の立ち上がりは攪乱のため明確に検出することができなかった。なお、この溝は第2次調査で検出された溝の延長部分と考えられ、第1次掘削が江戸時代後期ごろ、第2次掘削が幕末になるとみられる。

なお、S D -03の南肩から1.2m南側に溝と平行して並ぶ杭列がある。第1次調査で検出された杭列が溝の北側に位置することから、今回検出された柵と対になる可能性もある。

まとめ 規模の小さな調査であったが、各時期の遺構を検出することができた。中世の木棺墓が1基検出されたが、木棺墓が検出されたのは調査地の南西隅であり、この木棺墓が群を形成するのか、単独で埋葬されたのかは不明である。本地が鎌倉時代の段階ではどのように土地利用がなされていたか必ずしも明瞭でないが、集落のはずれの寺川付近に墓地が形成されていた可能性がある。平野氏陣屋跡関係の遺構では、第2次調査で検出された溝の延長部分がある。この溝はいったん埋没したものを再掘削している。ただし、当初は6次調査地点よりさらに東に延びていた溝が、再掘削の際には調査地中央付近までしか掘削されていない。このことから、屋敷地の構造に大きな変化のあったことがうかがえる。



調査地全景（南より）

### (11) 平野氏陣屋跡第7次調査

**位置と環境** 遺跡は標高約49mの沖積地に立地する。今回の調査地は、平野氏の陣屋本陣の西北隣接地に相当する。このため調査地西側では、本陣を区画する溝が検出されることも予想された。

**遺構・遺物の概要** 今回の調査では、中世の土坑、江戸時代後期～幕末ごろの溝跡、大正時代以降の土坑などが検出されている。

近世の遺構としてはSD-1001、SD-2001等がある。SD-1001は、調査地西半で検出された深さ約1.5mの大溝である。内部施設として、橋脚状の杭、堰2列がある。遺物は、陶器・磁器・火鉢・焰烙などが大量に出土した。また、大黒、稻荷などの土製人形もみられた。

SD-1001埋没後に形成された遺構として、SK-1001がある。瓦を集積した上に底部を穿孔した擂鉢を伏せ、さらに漆喰で上面を覆っていた。鉢のすぐ西側には人頭大の石があり、擂鉢を覆う漆喰が石の側面上端に密着していた。類例は姫路城等で検出されているが、位置から排水施設の可能性がある。時期は、江戸時代末～明治時代ごろとみられる。

**まとめ** 今回の調査では、江戸時代後期の溝を検出することができた。しかし、狭小な調査であったため、溝の方向等をおさえるには至らず、陣屋の大溝の配置については明確にすることができなかった。現在のところ、SD-1001は本陣西側を区画する溝となる可能性があるが、詳細は今後の調査で明らかにしていく必要がある。



▲ SD-1001完掘状況（東より）



◀ 第2トレンチ全景（東より）

## (12) 平野氏陣屋跡第8次調査

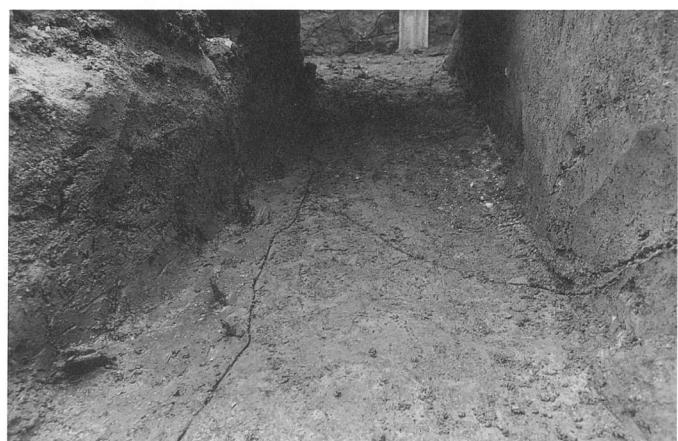
**立地と環境** 調査地点は標高約49～50mの沖積地に立地する。今回の調査地は、平野氏の陣屋本陣からやや南西にはずれたところにあたる。

**遺構・遺物の概要** 検出された遺構としては、中世の溝、江戸時代の溝がある。

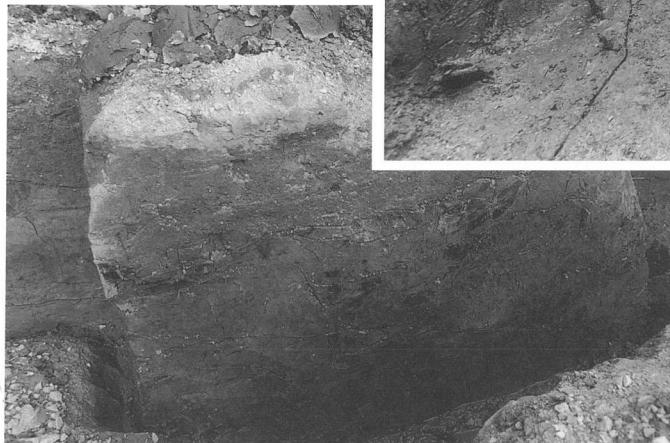
調査地全体に青灰色粘質土の堆積が見られた。13世紀頃の瓦器枕の破片がみられることから、これらの堆積層が形成されたのは平安末～鎌倉時代ごろと考えることができる。当時の調査地周辺は沼地となっていた可能性が高い。その後形成される中世遺構としては、東西方向とみられる溝（溝1）が確認されている。遺物が少ないため詳細は不明である。

近世・近代の遺構としては、調査地西端で南北方向の溝（溝2）が検出されている。北壁・南壁で東肩を確認したが、幅は不明である。遺物はほとんど採集できなかつたが、堆積状況等から時期は近代と考えられる。南北方向の杭列が伴う。また、この溝に切られる形で検出された、南北方向の溝（溝3）がある。位置は溝2よりも若干東寄りとなっている。北壁で東肩が確認されているが、西肩は溝2によって切られており、溝幅等は不明である。この溝はトレーナー中央やや南寄りのところで立ち上がっているため、南壁には現れない。同様にトレーナー内で立ち上がる溝（溝4）が調査区東端でも確認されているが、時期は不明である。まとめ 今回の調査の結果、調査地周辺が鎌倉時代ごろまで沼地状であったことが判明した。当地の土地利用を考える上でも重要な成果であったと考えられる。

調査地西端で検出された南北溝は第7次調査の溝に続く陣屋の堀跡とみられる。このことにより、陣屋の範囲が本調査地にも及んでいたことが確認された。



▲ 溝2・溝3



◀ 溝1

### (13) 保津・宮古遺跡第14次調査

**立地と環境** 遺跡は奈良盆地中央部、標高約45~50mの沖積地に立地する。遺跡西北部では調査が進展しており、古墳時代前期の集落が確認されているほか、「筋違道」と呼ばれる古代道路推定地の西側で行われた第4次調査では、飛鳥時代の倉庫群等が検出されている。今回の調査地は、この筋違道の地割りが現有道路としてとぎれた南側部分にあたる。

**遺構と遺物の概要** 今回の調査では、縄文時代～中世の遺構が検出されている。

縄文時代の遺構としては、SK-110がある。縄文時代後期の注口土器片などが出土した。

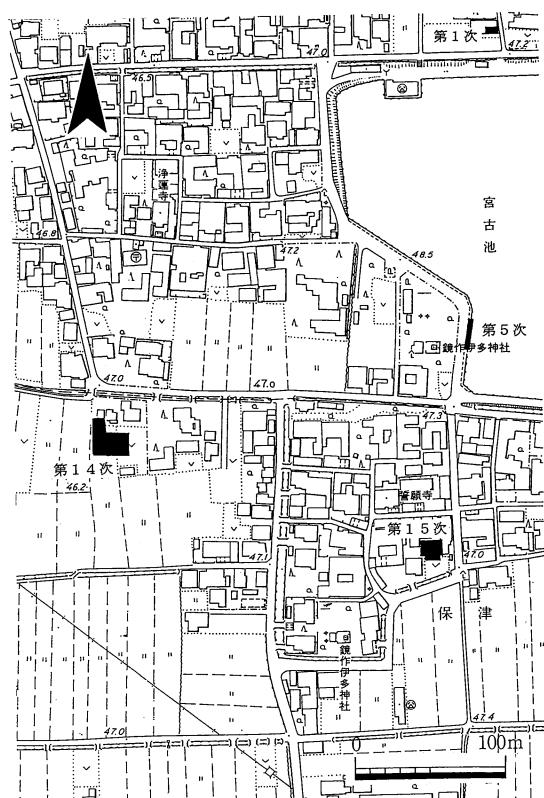
弥生時代の遺構としては、溝や土坑などがある。SD-103は調査区南半で検出された東西方向の溝で、西側では弧を描くように北に屈曲する。弥生時代後期後半の土器が大量に出土している。SK-101・SK-104は弥生時代後期の井戸とみられる。

古墳時代の遺構としては溝や土坑などがある。SD-101は調査区東半で検出された東西方向の溝である。埴輪がまとまって出土しており、古墳の周濠になる可能がある。出土した遺物には、家形埴輪・楯形埴輪・朝顔形埴輪・円筒埴輪などの埴輪類と土器がある。埴輪から時期は古墳時代中期と考えられる。SK-105は古墳時代後期の不整橢円形の土坑である。長軸3m、短軸1.7mを測る。SK-111は古墳時代後期の橢円形の土坑である。西半の上層部分はSD-106に切られている。下層より完形の須恵器壺が出土している。土坑の性格は井戸と考えられる。

古代の遺構としては溝や土坑などがある。SD-105は調査区西半で検出された、幅3m、深さ0.5mの北北西-南南東方向の溝である。再掘削されているが、当初の掘削は6世紀中

頃で、TK-10～TK-43形式の須恵器が出土している。また、再掘削された溝の最上層では7世紀後半の遺物もみられ、これが溝の最終埋没年代を示している。

調査地北端では、東西方向を基本とする溝SD-106が検出された。基本的にはSD-105を切るが、若干併存していた時期もあったようである。遺物は、流木等がまとまって出土しているほか、鉄製U字形刃先の破片も出土している。また、祭祀遺物として、土馬・斎串・馬下顎骨が出土している。なお、溝床面では人の足跡とみられる小穴が多量に検出されている。これらの溝のうち、SD-105は、その位置方向から筋違道の西側側溝の可能性がある。



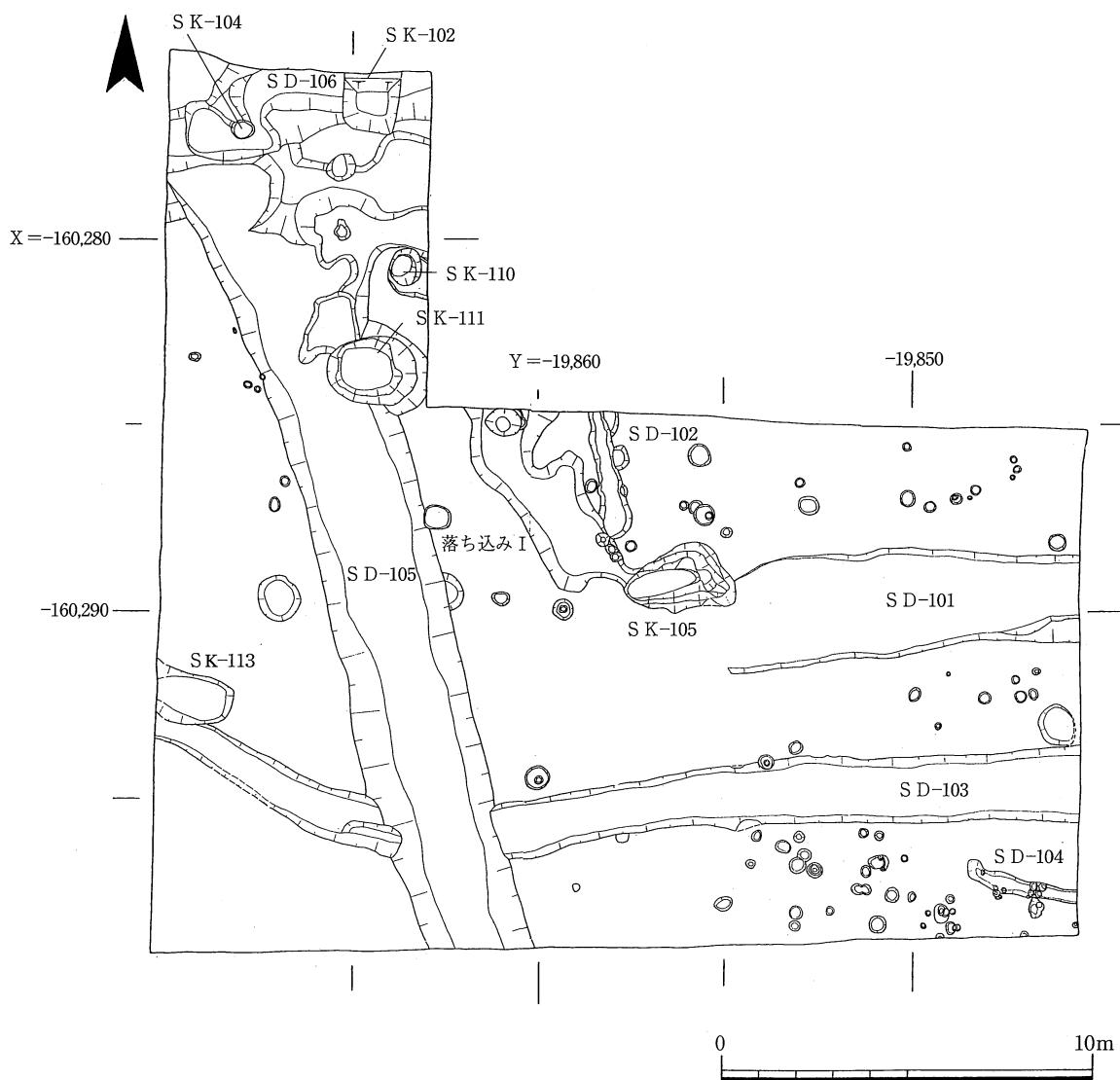
第7図 調査地の位置

まとめ 今回の調査では、縄文・弥生・古墳・古代の4時期にわたって大きな成果をみることができた。中でも注目されるのが、筋違道の側溝とみられる溝の検出であろう。古代道路を考える上で、筋違道の成立時期等をおさえることができたことは意義深い。

古墳時代中期では、古墳とみられる溝が検出されたが、後期には土坑が掘削されており、墓域としての土地利用は比較的短期間だったとみられる。

弥生時代後期の集落も検出された。特に溝 S D-103は、10次調査で検出された溝とは一連のものとみられることから、集落の中でこの溝がどのような役割を担っていたのか、今後の検討を要する。

今回の調査では、縄文時代後期の遺構も検出されている。西日本全体の傾向として、縄文時代後期から平野部に縄文集落が展開するようになることが指摘されているが、本調査地でも同様のことをうかがい知ることができた。



第8図 遺構平面図



調査地全景（南より）



SD-103土器出土状況  
(北より)



SD-101埴輪出土状況  
(北より)

#### (14) 保津・宮古遺跡第15次調査

**位置と環境** 保津・宮古遺跡は標高約45~50mの沖積地に立地する。これまで14回の調査が行われており、弥生時代~中世にわたる各時代の遺構が検出されている。特に遺跡西北部では調査が進展しており、古墳時代前期の集落が確認されている。一方、遺跡の東側では小規模な調査しか行われていないため、その様相については不明な部分が多い。

本地は現在の保津環濠集落の内部にあたり、中・近世の遺構が検出されることが予想された。また、弥生時代の遺物散布も知られることから、弥生集落の拡がりも考えられた。

**遺構・遺物の概要** 今回の調査では弥生時代、中世、近世の遺構を検出した。

近世の遺構としては2基の井戸や溝などがある。S E-01は調査区北西で検出された井戸で、直径1.5m、深さ2.5mをはかる。埋没段階の遺物には桟瓦・陶磁器等の近代の遺物がみられるが、掘削は近世末の可能性もある。井戸枠として直径0.6m、高さ0.9mの桶を2段重ねていた。また、井戸の北側に隣接して配水施設が検出されている。

中世の遺構には、土坑や柱穴などがある。S K-54は調査区西端北側で検出された土坑である。瓦器塊等が出土した。S K-55は調査地南半で検出された東西に長い土坑である。S K-56は調査区南西で検出された円形の井戸である。S K-59は調査地南端で検出された楕円形の土坑である。瓦器塊、土師皿等が出土している。これらの遺構の時期は、13世紀頃とみられる。

弥生時代の遺構には土坑がある。S K-201は弥生時代前期の完形ミニチュア壺1点の横置された土坑であるが、その意味や性格については明らかでない。S K-108は弥生時代前



調査地全景（南より）

期末の土坑で、壺1点が出土している。このほか、弥生時代の可能性のある土坑が数基調査されているが、遺物が出土していないため時期を明らかにすることはできなかった。

まとめ 今回の調査では弥生時代前期の遺構が確認された。このほか、大和第Ⅲ様式の土器も出土しており、この地区では弥生時代前期末から中期中頃にかけて生活が営まれていたことが考えられる。しかし、削平を受けているとはいえ、検出された遺構は極めて少なく、遺物量も希薄であることから、まとまった集落として捉えるにはまだ問題点が多い。

中世の遺構は13世紀代のものが中心であったが、12世紀の遺物もみられた。このことから、保津環濠集落の成立した時期が12世紀にさかのぼる可能性が高い一方で、調査地では13世紀ごろから本格的な土地利用が行われたと考えられる。なお、調査地では井戸と土坑が調査地南半を中心にまとまって見つかっている一方、調査地北東では柱穴が集中している。

近世～近代の遺構としては、井戸2基と溝が検出されている。井戸では、節を抜いた竹樋の配水施設が注目される。



S E-01・S K-12（西より）



S K-59遺物出土状況（南より）

### (15) 十六面・薬王寺遺跡第12次調査

**位置と環境** 遺跡は標高48m前後の沖積地に立地する。今回の調査地は第1次調査地の東南約90mの地点であり、西側80mで行われた権原考古学研究所の試掘調査では顕著な遺構等は確認されていない。しかし、南東20mで行われた第6次調査では古墳時代前期の方形周溝墓と見られる溝が検出されている。また、小字名が大門であり、付近に寺院関連の遺構が存在する可能性も考えられた。

**遺構・遺物の概要** 検出された遺構としては、弥生時代では河道や小溝など、中・近世では小溝などがある。S R-101は調査地中央で検出された推定幅7mの自然流路である。最上層から弥生時代中期後半の土器が出土しており、埋没後に弥生時代後期初頭の溝SD-101が掘削されていることから、最上層の形成された時期は弥生時代中期ごろと考えることができる。SD-101は調査地中央付近で検出された、幅0.5m、深さ0.3mの南東方向の溝で、トレーナー中央付近で終了する。SD-102はSD-101の南側に位置する幅0.5m、深さ0.1mの北西方向の溝である。弥生時代後期の土器が少量出土している。この2条の溝はほぼ直交する位置関係にはあるものの、溝の深さ等の問題から方形周溝墓となる可能性は低い。

**まとめ** 今回の調査では、弥生時代後期の遺構の存在を確認したが、遺構の密度は極めて低く、当地は弥生集落としては周辺部に相当するようである。また、当初予想されていた古墳時代前期の方形周溝墓群は本調査地まで拡がらないようである。

中世の遺構としては、東西方向の小溝群等がみられたにすぎない。遺物も極めて少量であり、近接して寺院等が存在したことを積極的に証明する資料は得られなかった。



第9図 調査地の位置



調査地全景（南より）

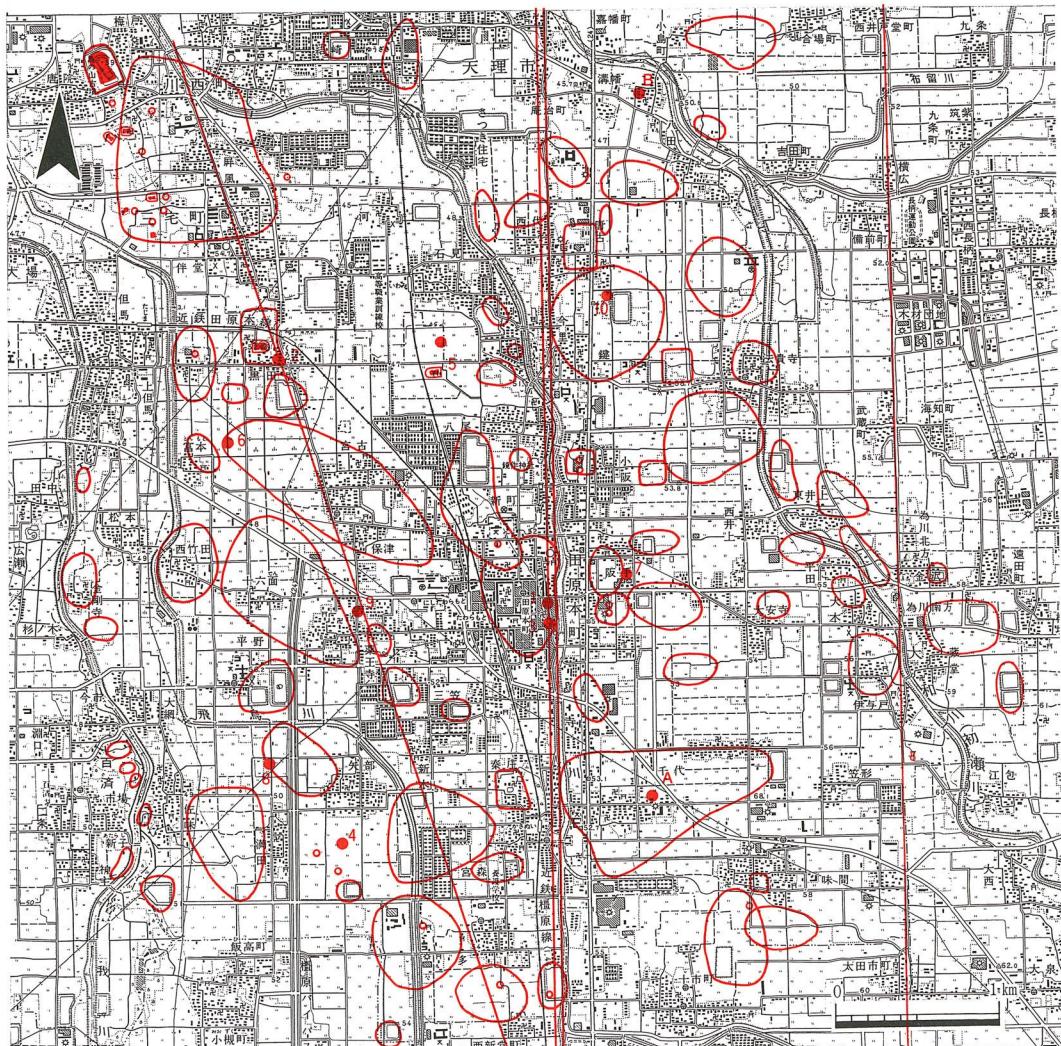
### III. 試掘調査・立会調査の概要

試掘調査と立会調査は1994・95年度の2カ年で12件を数える（第6・7表）。

唐古・鍵遺跡の通学路改修に伴う立会調査（10）では、北方砂層や環濠などの遺構が確認された。特に調査区南端では大環濠とみられる溝の北肩が、調査区北半では北方砂層の南肩が検出された。第59次調査第5トレーニングで検出された北肩とあわせて考えると、予想以上に広い流路となるため、河道が細かく分岐している状況も想定しておく必要がある。

八田の常宝寺では、本堂の建て替えに伴う試掘調査（B）を行った。近世段階の柱穴が1基検出されたが、創建年代等を把握するだけの資料を得ることはできなかった。

千代遺跡でも試掘（A）を行ったが、遺構・遺物はみられなかった。千代遺跡では数次にわたる試掘・立会が行われているが、遺構等が検出されることはまれである。今回の調査でも遺構・遺物ともに希薄な地域であることを追認する形となった。



第10図 田原本町の遺跡と試掘調査・立会調査地点

第6表 1994・1995年度試掘調査一覧

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	進達番号 (田教文)	進達日	調査日	内 容
A	千代遺跡	田原本町千代 123	関西電力(株)	仮設鉄塔の設置	220	95.9.18	95.11.27	2×2mの試掘坑を2ヵ所で設定。深さ1.5mまで掘削したが遺構はみられない。
B	常宝寺	田原本町八田 494-1	溝口快正	寺院の建替	150	95.8.4	95.2.14	0.5×2mの試掘坑を設定。礎石抜取後の柱穴を検出。0.4mの版築層を確認。

第7表 1994・1995年度立会調査一覧

1994年度								
番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	進達番号 (田教文)	進達日	調査日	内 容
1	平野氏陣屋跡	田原本町 796	堀内義雄	個人住宅新築	39	94.4.28	94.7.15	基礎工事部分で立会。深さ0.3mの掘削で表土層にとどまる。近世の遺物あり。
2	黒田遺跡	田原本町黒田 308-2	尾崎平式	農業用倉庫	400	94.3.29	94.7.19	基礎工事部分で立会。表土層内での掘削。
3	平野氏陣屋跡	田原本 445-2	桐山大輔	個人住宅新築	304	94.12.27	95.3.13	基礎掘削部分で立会。火鉢・焰烙が組み合わされた状態で出土。埋納遺構か。
4	矢部遺跡	田原本町矢部 411-1他	田原本町長	水路改修			95.3.29	水路擁壁工事部分で立会。掘削地西端付近で包含層がみられたが、他は河道堆積。
5	笹鉢山古墳群	田原本町八尾 306他	田原本町長	道路建設			95.3.29	擁壁工事終了後の埋め戻し土を踏査。遺物は少量で古墳の存在は確認できない。
1995年度								
6	保津・宮吉 遺跡	田原本町富本 7-1他	大和平野土地 改良区	水路改修	322	95.12.19	96.2.1	掘削は浅い。里道盛土内にとどまる。
7	阪手北遺跡	田原本町阪手 473-1他	松村吉清	倉庫建設	263	95.10.26	96.2.29	造成地東端の擁壁部分で立会。遺構・遺物共になし。
8	団栗山古墳 周辺	田原本町満田 343-2他	田原本町長	通学路改修	419	96.3.22	96.3.25	水路擁壁工事部分で立会。深さ0.6mの掘削で、遺構面には達していない。
9	筋違道	田原本町薬王寺 7-6	森田尊文	個人住宅新築	262	95.10.26	96.3.26	基礎掘削部分で立会。深さ0.3mの掘削で、遺構面には達していない。
10	唐古・鍵遺跡	田原本町唐古 96東側隣接地	田原本町長	通学路改修	412	96.3.21	96.3.26	水路擁壁工事部分で立会。大溝を含む溝3条、土坑1基、河道が検出された。調査地北半の河道は北方砂層とみられる。また、江戸時代末頃の南北暗渠が検出された。遺物は、弥生時代後期が主体をしめるが若干の古式土師器もみられる。

# 田原本町埋蔵文化財調査年報 5

1994・1995年度

平成8年3月29日

編集発行 田原本町教育委員会  
印 刷 日進印刷株式会社

